

企画展「彦根藩の足軽―歩兵たちの近世―」展示作品リスト

No.	指定	資料名称	員数	作成者	制作年	所蔵者
1 彦根藩足軽の編成						
1	重文	遠州懸河分限帳	1冊	河村信常	嘉永6年(1853)	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
2		御同心二十人手形	1通	吉川久太夫ほか	慶長18年(1613)頃	彦根城博物館 (木田余兵左衛門家文書)
3		大坂夏の陣図(若江合戦図)	1隻		江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
4	重文	物頭代々記	1冊		安政2年(1855)	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
5		井伊直孝御書付之写	1冊		江戸時代	個人 (西郷藤左衛門家文書)
6	市	彦根御城下惣絵図	6幅のうち 1幅	向坂縫殿介ほか	天保7年(1836)	彦根城博物館
7		家並帳	1冊		文化6年(1809)頃	彦根市立図書館
8		足軽組屋敷家相図	1枚		安政2年(1855)	個人
2 足軽組と藩政						
9		掟	1通	青木新右衛門	文政5年(1822)	彦根市立図書館
10		官事録	1冊	小野正好	文政7年(1824) ～文政10年(1827)	彦根市立図書館
11		御奉書御普請諸事留	1冊	西村昌高・大久保忠督	嘉永4年(1851)	彦根市立図書館
12	市	町奉行触書写	1通		安永9年(1780)	個人 (平田町町代中村家文書)
13		御書付之写	1通		元文3年(1738)	個人 (足軽佐藤家文書)
14		御物頭諸事留	1冊	大久保員好	万延2年(1861)	個人 (彦根藩大久保家文書)
15		御組歴代規矩留帳	1冊	小屋頭中	寛政12年(1800)	彦根市立図書館
16		上使御行列絵図	5巻のうち 1巻		江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
17		編み笠	1枚		江戸時代	個人
18		陣笠	1枚		江戸時代	個人
19		足軽組諸届・願書留	1冊		文政2年(1819) ～明治元年(1868)	個人
20	重文	西堀光統他五名連署上申書	1通	西堀太郎左衛門ほか	安政元年(1854)	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
3 太平の世の足軽の軍事						
21		火縄銃	1挺	銃台：国友 吉田直道 銃身：橋本惣太	江戸時代	個人
22		丸根付革袋	1口		江戸時代	個人
23		弾丸(砲弾型)	7弾		江戸時代	個人
24		御入部御覧留	2冊	増嶋高実	上：文化9年(1812) 下：文化10年(1813)	彦根城博物館
25		目当	1枚		江戸時代	個人
26		紺地桐紋袴	1領		江戸時代	個人
27		御櫓御武具之覚	1冊		江戸時代	個人 (足軽佐藤家文書)
28		御武具御修履留	1冊		寛政6年(1794)	個人 (足軽佐藤家文書)
29		畳兜	1頭		江戸時代	個人

企画展「彦根藩の足軽—歩兵たちの近世—」展示作品リスト

No.	指定	資料名称	員数	作成者	制作年	所蔵者
30		朱漆塗畳胴具足	1領		江戸時代後期	個人
4 幕末維新期の変容						
31	重文	ペリー浦賀来航図	1巻		江戸時代後期	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
32		小手分年番備立大略	1枚		江戸時代後期	個人 (彦根藩大久保家文書)
33		宮田御陣屋并千駄崎千代崎御役割帳	1冊		江戸時代後期	彦根城博物館 (木田余兵左衛門家文書)
34	市	御持筒組勤向之儀二付願書下書	1通		江戸時代後期	個人 (宇津木三右衛門家文書)
35	重文	彦根歩行由緒帳乾(六三)	1冊		江戸時代 ～明治時代初期	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
36		銃隊稽古再度願	1通	佐藤友右衛門ほか	江戸時代後期	個人 (足軽佐藤家文書)
37		御軍役炮術中り附帳	1冊		江戸時代後期	彦根城博物館 (北川鍋太郎家資料)
38	市	彦根藩家老用状	1通	御同役中	江戸時代後期	彦根城博物館 (木俣清左衛門家文書)
39	重文	スペンサー連発銃説明書	1冊		慶応元年(1865)	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
40		武器書付	1通	加川猪兵衛	江戸時代後期	個人 (足軽佐藤家文書)
41		びわ日記	3冊	瀧谷辰五郎	大正元年(1912)	個人
5 足軽と文化教養						
42		竹に虎図	1幅	大館素雪	江戸時代後期	個人
43		十六羅漢図	1幅	吉田雪齋	明治11年(1878)	個人
44	市	雑詠百首	1冊	外村三行(省吾)	明治6年(1873)	個人 (平田町町代中村家文書)
45		鹿図	1幅	岸竹堂	江戸時代後期 ～明治時代	個人
6 旧彦根藩足軽のその後						
46		彦根藩藩政改革条件	1冊		明治4年(1871)	個人 (足軽佐藤家文書)
47		書状下書	1通		明治時代	個人 (足軽佐藤家文書)
48		中嶋勘次郎願書	1通	中嶋勘次郎	明治時代	個人 (足軽佐藤家文書)
49		画賛「攻病尽・・・」	1枚	遠城謙道	明治時代	彦根城博物館 (秋山誠三氏寄贈)
50		画賛「柳江院殿追善」	1枚	遠城謙道	明治時代	彦根城博物館 (秋山誠三氏寄贈)
51		遠城謙道書簡	1通	遠城謙道	明治33年(1900)	彦根城博物館 (若林繁氏寄贈)

※指定欄の「重文」は重要文化財、「市」は彦根市指定文化財であることを示す。

作 品 解 説

1 おおさかなつ じんず わかえ かつせんず 大坂夏の陣図 (若江合戦図) 1隻 (作品リストNO.3)

江戸時代後期

縦 156.9cm 横 361.2cm

当館蔵 (井伊家伝来資料)

慶長20年(1615年)の大坂夏の陣のうち、若江(現大阪府東大阪市)で井伊隊が大坂方の木村重成隊と戦った様子を描いたもの。遠景には右手に大坂城、左手に四天王寺が描かれ、画面左から右に向かって攻める「赤備え」の戦士たち(井伊隊)の中には、鉄砲を持った彦根藩の足軽の姿も確認できます(画面左下)。

ここで大きな武功を挙げた井伊家二代直孝は、元和元年(1615年)、同3年、寛永10年(1633年)に5万石ずつの加増を受けて足軽の増員をはかり、同年には37組1120人(弓足軽6組120人、鉄砲足軽31組1000人)の足軽を召し抱えるに至りました。この人数は、初代直政が佐和山に入部した慶長6年頃に従っていた足軽の数の倍にあたります。そして、この人数が江戸時代を通じて概ね維持されました。



(画面左下の拡大図)

2 おきて 拵 1通 (作品リストNO.9)

青木新右衛門筆
文政5年(1822年)
縦 31.0cm 横 177.0cm
彦根市立図書館蔵

彦根藩の足輕は、「組」を単位に、物頭（足輕大将）と呼ばれる彦根藩士に統率されます。物頭は、有事には組の足輕を率いて出陣し、組内の足輕の処罰権を持つなど、強い統率権を持ちました。

本史料は、文政5年に物頭の青木新右衛門が配下の足輕に対し、基本的な遵守事項を定めた拵書です。この5箇条目で、足輕が勤めなければならない役割として、「御普請の儀」を重視している点が注目されます。この「普請」とは土木工事を指し、彦根藩では普請方が城郭をはじめ、城下町のインフラ整備や領内の街道の維持管理などを一手に担当していました。彦根藩の足輕は、こうした普請方の土木工事などに動員され、彦根城の石垣の積み石の運搬や石垣積みなども行ったのです。これを「出人」と呼び、平時の足輕にとって、体を鍛える日常的な軍事鍛錬の一環でもありました。



3 あしがるぐみしよとどけ 願書留 1冊 (作品リストNO.19)

文政2年(1819年)～明治元年(1868年)
縦 24.9cm 横 17.3cm
個人蔵

本史料は、文政2年から明治元年にかけて、ある足輕組内で足輕から提出された願書などを書き留めた帳面です。この中には、組の人事管理を担った手代役の沢五平の履歴書が留められています。これを見ると、沢が町奉行所に約12年間、御国産方（藩内の特産品などの生産・販売を統括した機関）に約1年間



出向し、勤務したことがわかります。このように、彦根藩の足輕は、普請方からの動員だけではなく、藩内の諸役所に出向し、役所での実務も担っていたのです。これを彦根藩の足輕では「引人」と呼び、組内の3割程度の足輕が常時「引人」として実務を担っていたと考えられます。

4 御入部御覽留 2冊 (作品リストNO. 24)

増嶋高実筆

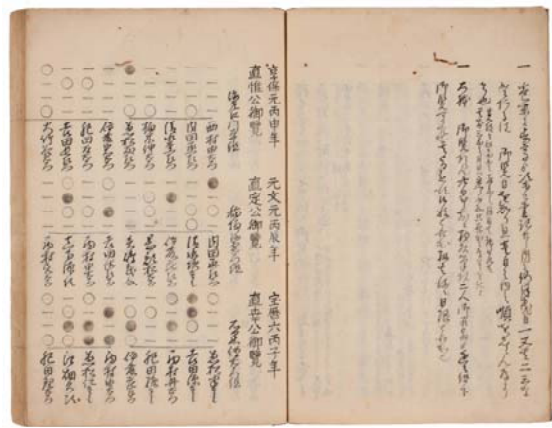
上：文化9年(1812年) 下：文化10年

縦 23.6cm 横 16.6cm

当館蔵

本史料は、井伊家12代直亮の入部（藩主として初めて国入りすること）に際し、歴代当主が入部儀礼として上覧した足軽などの武芸稽古の様子を写し留めたものです。2冊からなり、7代直惟から12代直亮の時（入部のなかった9代直禎を除く）に披露された弓と鉄砲の結果が、「一」（的から外れる）、「○」（的に命中）、

「●」（的の中央に命中）の三段階で記されています。藩主と足軽が公的に対面する儀礼の実態がうかがえるとともに、各時期の足軽組の構成員全体が判明する大変貴重な史料です。



(上巻の冒頭部分)

5 ペリー浦賀来航図 1巻 (作品リストNO. 31)

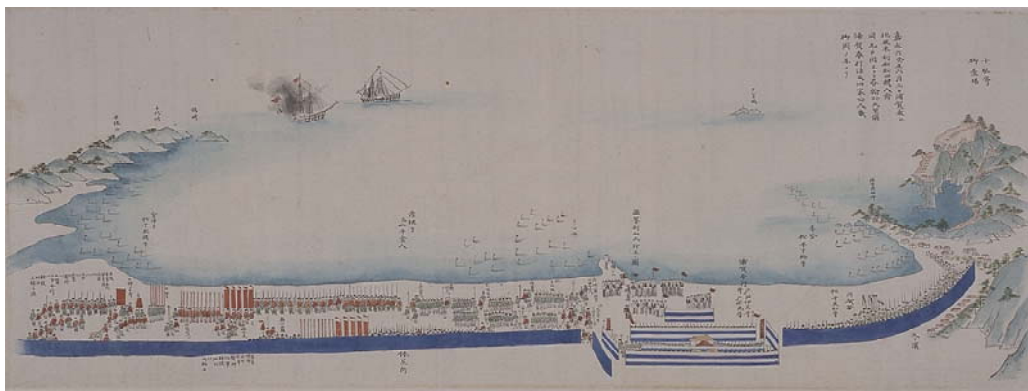
重要文化財

江戸時代後期

縦 27.3cm 横 74.0cm

当館蔵 (彦根藩井伊家文書)

嘉永6年(1853年)、開国要求を旨とする国書がペリー率いるアメリカ艦隊によってもたらされました。本図は、それに際して海岸を警固する彦根藩兵などの様子を描いたものです。当時、彦根藩は幕府から相模国三浦半島の海岸警衛を命じられており、藩兵を三浦半島に駐屯させていました。本図には海岸に整然と並ぶ彦根藩兵の姿が描かれ、本図中央付近には足軽の姿が確認できます。こうした欧米列強による東アジア進出は、太平の世であった日本近世社会に再び軍事的緊張をもたらし、それに伴って彦根藩の足軽は活躍の場を再び戦地に移すこととなっていったのです。



画面中央の拡大図

6 ^{たけ とら ず} 竹に虎図 1幅 (作品リストNO. 42)

大館素雪筆

江戸時代後期

縦 132.6cm 横 60.3cm

個人蔵

彦根藩の足輕のおおだてそせつ大館素雪が描いた作品です。素雪(1802-?)は享和2年(1802年)に生まれ、喜太郎と称しました(素雪は画号)。彼は、天保7年(1836年)に藩で作成した「彦根御城下惣絵図」(作品リストNO.6)に「絵図役」として名を連ねており、「引人」として普請方に出向した先でも画業に携わっていたことがわかります。彦根藩の足輕の手による絵画作品は、確認されている数はずかであり、大変貴重な一品と言えます。



7 ^{なかじまかん じ ろうがんしょ} 中嶋勘次郎願書 1通 (作品リストNO. 48)

中嶋勘次郎筆

明治時代

縦 14.8cm 横 68.3cm

個人蔵

本史料は、旧彦根藩足輕の中嶋勘次郎が「伍長役」に提出した願書です。この願書の中で中嶋は、百姓に転業するため、道具などを求める資金として50両から60両の前借りを願い出ています。この史料が作成される背景には、明治時代になって進められた彦根藩の士族改革があります。これによって、足輕は「卒(族)」と呼ばれるようになり、農業や商業への転業が認められました。それと同時に、家禄と常備兵の削減が進められ、彼らの生活は困窮していきます。中嶋の願書は、まさにこうした社会情勢の中で、一人の旧彦根藩足輕がこれまでとは違う生活を歩み始める一場面を示しています。

